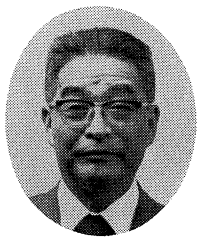
随想

今は昔



鈴木忠良

ずいそうずいそうずいそう

押してだめなら引いてみな

手に負えない悪名高いクラスを担当したことがある。第一、クラスとしての形態をなしていない、何をしてもびりである。その上、常に騒然としているので、授業に出た先生から、しょっちゅう苦情を申し込まれる。

先輩の助言を得て、おどしたりすかしたり、手を変え品を変えやってみたが、さして効果が表われない。

ある日、中心人物と目していた四、五名に、「○○君、君の兄さんは××君だったな、元気かい」といった調子で話しかけ、兄や姉の近況をうなずきながら聞いてやった。さて翌日、代表人物君の良いところだけを並べた手紙を、それぞれの兄、姉宛にして持たせて帰してみた。効果てきめん、一週間ほどで、悪童連中ぴたりと鳴りをひそめてしまった。

間接的賞賛法とか、異性代言法（私の造語、教師・生徒を問わず、あこがれの的である異性の口をかりて、代わって話してもらう方法）とか、たくさんの方法があることを知ったのは、ずっと後になってからのことである。

遠い道

週半分は遅刻をする生徒がいた。自転車のタイヤ入手困難な時代の話である。ひどくしかってみたが効果がない。当人は、一言も弁解しない。ただしかられている。級友の一人が、「先生、あれの家、うんと遠いんだぞい」ということばに、耳を傾ける余裕もない。

それでも数日後、行ってみることにした。その子と同方向の友人が、一人減り、二人減りして、やがてその子と二人きりになってしまった。遠いことが、いかにも自分の罪であるかのように、恐縮しきっている子と、話の種もつき黙々と歩いた。遠かった。家は隣村との境の山すそにあった。

数年後、この生徒と偶然会う機会に恵まれ、「中学時代、先生と歩いた二時間が、いちばんの思い出です」と言われたときほど、困惑したことはない。

この遠い道は、教師という職業への厳しい自覚と、ここまで来た以上、もう引き返せないのだぞと、己にしかと言いきかせる不退転のことばを、暗示しているかのようであった。

過猶不及

秋から冬にかけて、わが家の庭に小鳥がたくさん来る。

おなが、かけす、むくどり、ほおじろなどは、敏感で用心深く、容易に人に慣れない。山ばとは、意外に神経が太く貪欲で、豆を食べ過ぎて動くのがおっくうなのか、孫達が近寄っても飛び立たないことがある。

早朝、妻とふたりで、ガラス越しに小鳥を観察している図は、イギリスで人気のあるバード・ウォッチングには及ばないが、ヨーロッパの人間に聞かれても、恥ずかしくない風景である。

ところが、その同一人物が、少年時代、動物たん白をみずから補給するため、小鳥をわなで捕え、むし焼きにして食べていたと話したら、彼らどんな顔をするであろうか。

事実、戦前の食生活はひどいもので特に農村に育った者にとって、魚・鶏肉・鶏卵などは、盆・正月・祭礼・病気用で、いつでも口にはいるものではなかった。いきおい、学校の帰り道など、わなの話に夢中になり、魚がいるという情報を得れば、ふっ飛んで行くことにもなる。このような少年時代をなつかしむ五十台も多いであろう。

今は、食物の中にうずまっているようなもので、間食のためか、夕食を抜いても、空腹を感じない子もいるという。「物の豊富なことが最大の不幸」などとうそぶく気違いじみた世の中である。

話はとぶが、我々日本人は、犬の飼育が一般にへたで、良犬をだ犬にしてしまうことが多い。その点、狩猟民族といわれるヨーロッパ系はたくみで、こつは過食をさせないことにあるという。ハングリーの精神は、スポーツ界だけのことではないらしい。

我々は、確かに、物にあふれた現在のような社会を夢みて、しゃにむに働いてきた。しかし、成就の暁に、当然付随して表われる暗雲を、想定することができなかった。

凡夫の考えは、しょせん「過ぎたるは、なお及ばざるが如し」と看破した二千五百年前の孔子のけい眼に、遠く及ばないのであろうか。それとも人間の精神のある部分の、停滞・退えいは救いがたいものなのであろうか。

（白河市立白河中央中学校長）